

いにしえ湖南ものがたり

まつばらたなか いせき

松原田中遺跡



弥生時代前期の溝が見つかる！（１区）

弥生時代中期の水田を掘り下げると、弥生時代前期（約2500年前）の弧状のように溝が見つかりました。

溝には水が流れたことを示す砂が溜まっており、掘り直しされていたこともわかりました。

溝の中からは、壺や甕（かめ）などの土器、木製品が出土していますが、これからおこなう周辺の調査でこの溝が何に使われたのか明らかになるかもしれません。



弥生時代前期の溝

人々の住んでいたところ（２区）

調査区の南東側では、古墳時代前期初頭（約1800年前）の溝と竪穴住居跡が見つかりました。

住居の床面では、中央に粘土を貼った小さい穴と7本の柱穴のほか、円形にめぐらしていた細い溝（周壁溝）が確認されました。

また、幅1～2mの溝が竪穴住居跡のまわりをぐるりと囲んでいることもわかっています。この溝からは、大量の土器が出土しました。この溝は、他の調査から竪穴住居のまわりにめぐらせる溝（周堤溝）の可能性が考えています。



溝からたくさんの土器が見つかりました。



古墳時代前期初頭の竪穴住居

鳥取西道路の

遺跡を掘る！

第19号 2010年11月22日

今年度の調査も終盤にさしかかっています。

本高弓ノ木、高住平田、松原田中の各遺跡は丘陵に挟まれた平野部にあり、それぞれ昔の田んぼを確認しています。



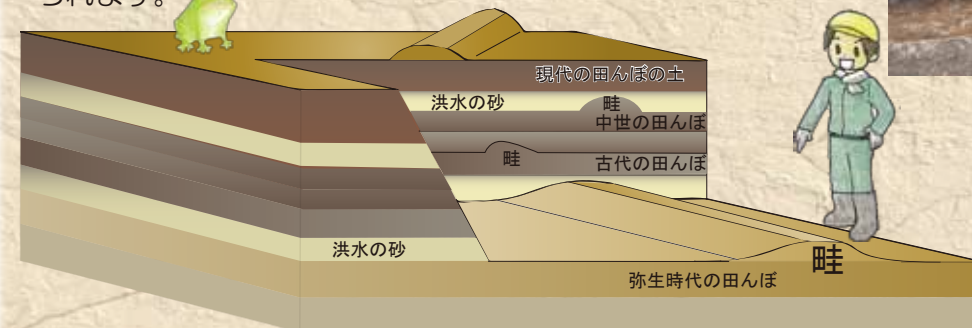
田んぼを発掘する

①は松原田中遺跡1区で見つかった弥生時代の田んぼ。調査では、まず田んぼの間に通路や境界として土を盛り上げた畦（アゼ）を探していきました。

畦は上につくった田んぼを耕すことで、周りの土が何度かき混ぜられてしまうので、発掘調査の中でそれを見つけることは、簡単ではありません。

しかし、②のように洪水で運ばれた砂によって田んぼが埋まると、砂を丁寧に掘り下げていけば、きれいにその姿を見つけることができます。そのため、こうした洪水の跡は我々調査員にとって、調査の手掛かりとなるのです。

松原田中遺跡では弥生時代以来、たび重なる洪水の被害に遭いながらも、その都度田んぼが復旧された様子がうかがえます。災害に負けず、田んぼをつくり続けた古代の人々の苦労が感じられます。



①弥生時代の田んぼ



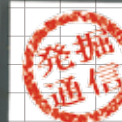
②地層の断面

赤丸の部分は砂の下に残された畦の盛り上がり

（財）鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所

〒680-1133
鳥取市源太12番地
（旧鳥取湖陵高校美和分校内）

TEL：0857-51-7553
FAX：0857-51-7550
メールアドレス：
matsuik@pref.tottori.jp



現地説明会へのご参加、御礼申し上げます。

11月3日（水）は、にわか雨に降られ肌寒い天気でしたが、本高弓ノ木遺跡で90名、高住平田遺跡で85名と多くの方々にご参加いただきました（ホームページでは当日の様子をご覧いただけます）。

また、松原田中遺跡も12月4日（土）に現地説明会を行う予定です。詳しくはホームページ、新聞等をご確認ください。

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

埋もれた太古のくらし

もとだかゆみのき いせき

本高弓ノ木遺跡



これまで、水路や盛土遺構など、主に大きな遺構を中心に紹介してきましたが、今回は、小さいながらも、実際の道具の使用状況や、遺跡周辺にいた動物を知ることのできる遺構について紹介します。

溝の底の工具痕



黒い土を掘ると...



幅約15cm、深さ約2cmほどの痕跡で、刃先の幅が分かります。

鹿の通り道

釣山の裾を流れていた弥生時代中期の溝で、鹿の足跡がみつかりました。これまで弓ノ木遺跡では牛の足跡を何度かみつっていますが、鹿の足跡は初めてです。

釣山から下りてきた鹿がこの溝を渡っていったのでしょう。後ろにずれた跡もあり、滑りやすい溝の斜面を駆け上るようすが思い浮かびます。

以前にホームページでも紹介しましたが、10月には発掘現場に雄の鹿が現れました。西側にある本高の丘陵へ走り去る姿に驚かされたものです。

昔は滑りやすい溝、今は車の通る道路。種類は違いますが、いつの時代にも、行く道を阻む障害物に鹿は苦労しています。



発掘現場に現れた鹿

足跡は周りの土に押されて、つぶれているので、ひづめの先端が尖った形になっています。

*実際の足形→



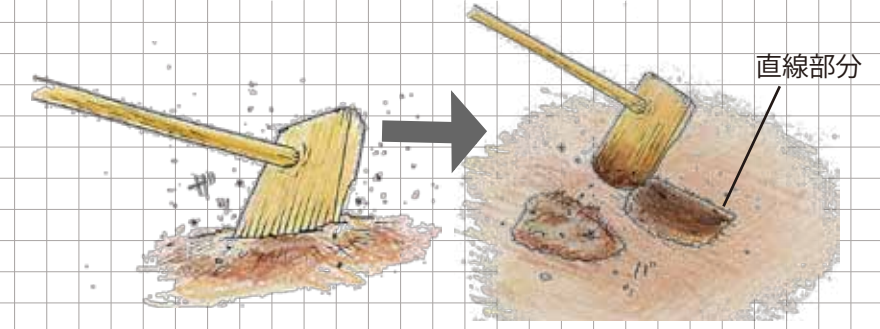
鹿の足跡

弥生時代後期（約1800年前）の盛土遺構のまわりにめぐっている溝の底から、半円形の「くぼみ」がたくさんみつかりました。

大きさや形から、これらの「くぼみ」は溝を掘った時に使ったクワやスキ（スコップ）の刃先の跡と考えられます。

刃先の跡は、溝の底から斜面にかけて列になって続いていました。直線部分が斜面の方向に向いていることから、使われていた道具がクワだったとすると、底へ向かって後退しながら、もしくは斜面に向かって前進しながら溝を掘っていたことがわかります。

刃先跡のできる状況(クワの場合)



最初に刃先が地面に入った所がきれいな直線となります。その後、クワならば手前、スキならば外側へ土を掘りおこすので、半円形の「くぼみ」ができます。

池のほとりに住んだ人々

たかずみひらた いせき

高住平田遺跡



古代の遺構を調査

古代の地層を掘り下げたところ、調査区の真ん中で、南北に延びる長さ約50m、幅0.5mほどの細い溝が3本みつかりました。このうち東側の溝は途中で真ん中のものと合流していました。

これらは、古代から中世にかけて流れていた川（12河川）とほぼ同じ方向に延びていて、地形にあわせてつくられたと思われます。

また、溝はほぼ平行に掘られていました。溝の間は約2mあって、この部分を道として利用していたのかもしれませんが。



調査区を上空からみたようす（写真の上が北）



川の西岸あたりでは直径1mほどの穴がたくさんみつかりました。

この穴は、白い均質な粘土層まで掘られていて、その下にある黒い腐植土には達していませんでした。

このことから、土器をつくったり、土壁に利用したりする粘土を採るために掘られた穴だったと考えています。

川の東側を探る

現在発掘中の2区南東で、新たな調査区を掘り始めました。

ここでは、2区でみつかった川の続きを確認するとともに、その東側を人々がどのように利用していたかということなどを調べることにしています。



調査区を西上空から見たところ